



LUI「公募研究 A」成果報告書

研究課題（和文）：現代中国と日本文藝—「審美現代性」に注目して

研究課題（英文）：Modern China and Japanese Literature — with a Focus on "Aesthetic Modernity"

申請者名・所属先：伊藤徳也・総合文化研究科
海外招聘者名：

1. 研究の目的

中華人民共和国建国後文革終結までの中国は、徹底的に「審美現代性」（自己目的的發展衝動）を批判し抑圧したが、1980年代以降その抑圧を大いに緩めた。とは言え、抑圧は一貫して続き、抑圧と寛解が織りなす創作環境の変化と表現形式の多様化が80年代以降の中国文学を特徴づけている。その中で日本文藝は寛解への趨勢をサポートする要素として、また、その趨勢に適応する形で、現代中国社会に受容されてきたのではないか。その実態を建国前からのいくつかの顕著な事例に即して解明したい。

2. 研究開始当初の背景

昨今は、日本文藝の内容を前提知識として踏まえた中国語の記事が散見され、現代中国の作家の中には、日本文藝に啓発されて執筆活動を始めたり行なったりした人々もいる。戦前、周作人は日本文藝を積極的に中国に紹介したが、彼が感じた日本文藝の訴求力の核心には「審美現代性」があり、それは1980年代以降の中国作家にも共有されているのではないかと思われた。

3. 研究の方法

数量的な現象に関しては、各種の調査報告書や論著のデータを照合し整理分析した。質的内在的分析は、個別に影響受容関係を辿るテキスト分析を行った。近年の日本文藝の一般読者の受容に関しては、ネット記事を初歩的に調査した。

4. 研究成果

・近現代中国における日本文学作品の翻訳書の点数、海外文藝全体の中での日本文藝が占める割合を確認した。出版点数は時代の進展

に従って増加、1980年代以降大きく増加するが、2000年代以降は80年代からさらに数倍から十倍程度に大幅に規模が拡大した。

・中国社会における海外文藝全体の中での日本文藝が占める割合はいまだ小さいと推定される。例えば、復旦大学の「世界文学史」最新版では日本文学は2%の紙幅を占めるに過ぎない。

・戦前日本文藝を精力的に翻訳・紹介した周作人は「生活の芸術」というテーマを打ち出したが、彼は日本の生活文化に「生活の芸術」が濃厚に生きていたと言った。彼の言う「生活の芸術」には「審美現代性」が顕著だが、それに対して、哲学美学者等が言う「生の技法」は、英語で言うと「生活の芸術」と同じ"art of living"だが、「審議現代性」が無化あるいは最小化されている。

・周作人は『徒然草』を中国語に翻訳する中で、“人情物理”という審美＝倫理的判断基準の手がかりを得たと推察される。

・川端康成（80年代前半）、村上春樹（90年代末-00年代）、岩井俊二（90年代末-00年代）が中国の作家に与えたインパクトを確認した。川端康成『雪国』中の平凡な描写から、本格的デビュー前の莫言が読み取ったものには「審美現代性」が認められる。

・初期松本清張の渋い芥川賞受賞作に対するネット記事（豆瓣網）の読後感の中には、「審美現代性」への志向が認められるものもあった。

・正統派文学（日本で言うところの純文学）が文藝全体の正統的中心であるとする通念は、おそらく1980年代に動揺し始め、90年代に瓦解したと考えられる。学校教育などの現場では21世紀現在においても相変わらずであるようだが、現実の中国人社会の享受・受容実態はそれとは異なるようである。

・文学の中でも所謂ジャンル文学の影響力が大きくなり、中国人享受者にとっての日本文藝の中心も、ジャンル文学（特に推理小説、サスペンス）の方に大きく傾いているが、そもそもそこには、正統派文学自体がSFやサスペンスの要素を大胆に採用したハイブリッドなものに変化してきているという世界文学史的な背景がある。



・日本文藝が現代中国社会に強烈で巨大な影響を与えた最初（70年代末～80年代）は、文学よりも映画やテレビドラマだった。

・80年代後半から90年代にかけて放映された日本のテレビドラマ、アニメーション、特撮作品は、00年代以降の国産作品奨励外国産作品制限政策の影響を受けなかったため、広く深いインパクトを中国社会（特に70年代80年代生まれ世代）に与えたと考えられる。

・80年代から90年代にかけて中国のテレビでさかんに放映された日本のアニメーションが中国の学生に与えた影響については、陳其佳『日本動漫影響力調査報告——当代中国大学生文化消費偏好研究』（人民出版社、2009年）が最も参考価値が高い。それによると、日本のアニメーションの暴力描写と性描写に関しては、拒絶反応も少なくなかった。しかし、その一方で、日本の作品におけるその二つの描写の無邪気な解放性には秘められた訴求力もあったのではないかと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔図書〕なし

〔雑誌論文〕

・伊藤徳也「周作人に於ける“人情物理”（“物理人情”）其二—『徒然草』翻訳、魯迅への風刺、「知堂」命名—」（『周作人研究通信』第11号、2020年）

・伊藤徳也「魯迅『野草』連作の最初」（『九葉読詩会』第6号、2021年）

〔学会発表〕

・『『生活の芸術』と『生の技法』』（東京大学HMCセミナー、2019年12月23日17:30-19:30、伊藤国際学術研究センター）

・「周作人と日本文学」（東京大学HMCセミナー2020年9月25日17:30-19:30、ZOOMミーティング）

〔その他〕

「武田泰淳セミナー」（2020年9月19日14:00-17:00、ZOOMミーティング）企画・司会